

観光論における「環境の概念」の特徴と変遷に関する研究

Survey on the features and changes of the environmental concept in Tourism Studies

○近藤 紀章¹ 近藤 隆二郎²

Noriaki Kondo Ryujiro Kondo

ABSTRACT: Today tourism studies become one of the important issues in Japan. So, we must grasp how the each tourism researcher has recognized and treated the environmental concepts. And we have to clarify the relation between the environmental concepts in tourism studies. That is the purpose of this research. First of all, the present condition of both relation was explored by carrying out the survey of the environmental concept from the each tourism paper. From here, we consider the environmental singularity and environmental diversity of a concept in a tourism theory. Next, Quantification^{III} was performed, in order to fix the relation between the items of an environmental concept. By the cluster analysis we classified the each items. Based on these results, it is considered that we can see the changes of the environmental concepts in the tourism theory.

KEYWORDS: environmental concepts, Tourism studies, Survey, Quantification^{method III}, cluster analysis

1. 研究の背景と目的

1.1 本研究の目的

近年、都市活性化やまちづくりなどの政策として観光に対するまなざしが集まっている。本研究では実務的要請の高まっている「観光」に注目する。本研究の目的は、理論としての環境が概念として観光にどのようなとりこまれ、活かされているのか、その多様性や特異性について探る。さらに、観光論に取り込まれた概念の変遷を明らかにすることである。

1.2 観光の現状

観光はさまざまな実務的要請にもかかわらず、研究としては「観光に関する学際的研究には、観光そのものを総合的に研究するため、諸科学の集大成としてひとつの観光学にまとめる動きがある。しかし、観光学自体の体系はいまだ不安定であり、観光そのものを対象とした独自の理論研究は見られない」¹とある。これは、観光が産業や政策の一部ではなく、近年ようやく社会的現象として認知されはじめていている。

1.3 エコツーリズム(eco-tourism)

近年、環境＝エコ(eco)という短絡的発想も手伝って、観光の領域では「エコツーリズム(eco-tourism)」が脚光を浴びている。「観光学辞典」²によると、エコ

ツーリズムは、「環境にやさしい観光」という大意であり、「単に観光行動が自然に負荷をかけないというだけでなく、観光で消費された金が、観光地や観光対象となる自然環境の保全に役立つ」といわれている。

1.4 観光における環境

観光研究の入門書のひとつである「観光学入門」³の環境と観光の章には、保護地域の指定による自然保護、トラスト運動、自然と触れ合う観光、観光による自然環境へのインパクト、持続可能な観光、観光を通じた自然環境保全への貢献、といった項目に関する記述があげられている。したがって先のエコツーリズムの例から明らかであるように、観光における環境とは狭義の「自然環境」における開発と保全として環境を認識している。

1.5 「環境の概念」という視座

環境の概念は一言で説明がつかない。そもそも、環境研究は衛生や公害といった「負」の制御に端を発して、現在はまちづくりや環境教育といった分野まで広がっている。そこで、本研究は観光において取り扱われた「環境」の概念に着目し、これを研究動向や論争を調査し論点別にまとめていく「サーベイ論文」の手法を用いる。

¹ 大阪市立大学大学院文学研究科 Graduate School of Literature, Osaka City University

² 滋賀県立大学環境科学部 The University of Shiga Prefecture, Environmental science Graduate School

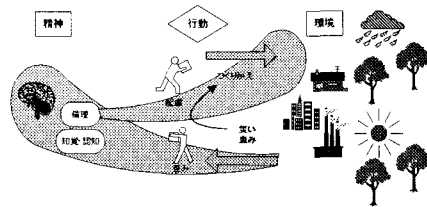
サーベイ論文で主観的にまとめた論点に対する裏付けとして統計学的処理を行う。まず、環境の概念に基づいて各論文の類似性や共通性について明らかにするために数量化Ⅲ類を行う。さらに、それらを分類し、観光論としてまとめるためにクラスター分析を行う。これに基づいて、観光論の取り扱う環境の概念の変遷をまとめる。

- ・ 観光関係の学会
- ・ 観光学部の紀要
- ・ 観光関係の専門誌

論文の公共性	論文集や雑誌が公表されているかどうか
時間的基準	論文集の創刊年ー2001年10月まで
論文の分量	4-10枚
表記言語	日本語

論文集のタイトル	論文数
旅の文化研究所 研究報告	20
観光に関する学術研究論文 入選論文集	44
大阪明浄大学紀要	16
立教大学観光学部紀要	42
立教観光学紀要	12
日本国際観光学会論文集	11
観光研究	52

そこで、環境研究の専門書として評価の高い「環境計画論」⁴ から人間環境系とホモ・シグニフィカンス (homo-significance) の概念、青木⁵ による物的環境の知覚による評価方法を参考にして、人間と環境のつながりを次のような図に表した。また、これを参考にして、「環境の概念」を以下のような構成にまとめた。



「環境の基本概念」が抽象的な概念を取り上げるのに対して、観光の文脈において「環境の身体性」として働きかける対象は観光地の環境である。したがって、図2の環境を観光地に限定し、これを地域空間に関する項目として取り上げる。

まず、環境研究の専門書として評価の高い「環境計画論」⁶、環境に関する公的報告書である「環境白書」⁷、Ⅲの地域の問題をまとめた「地域問題300選の概観にある上位問題の項目」⁸から項目の候補を作成した。

産業廃棄物	二、三	産業廃棄物	二、三
生活家電整備	二、三	生活家電整備	二、三
経済成長	二、三	経済成長	二、三
環境設計	二、三	環境設計	二、三
国土開発	二、三	国土開発	二、三
リサイクル	二、三	リサイクル	二、三
コミュニケーション	二、三	コミュニケーション	二、三
参加	二、三	参加	二、三
交流	二、三	交流	二、三
政策	二、三	政策	二、三
教育	二、三	教育	二、三
事例	二、三	事例	二、三
環境評価	二、三	環境評価	二、三
環境インジ	二、三	環境インジ	二、三
生物多様性	二、三	生物多様性	二、三
野生生物	二、三	野生生物	二、三
除水垢	二、三	除水垢	二、三
除水垢	二、三	除水垢	二、三
生物汚染	二、三	生物汚染	二、三
化学物質	二、三	化学物質	二、三
地盤環境	二、三	地盤環境	二、三
土壤環境	二、三	土壤環境	二、三
地下水汚染	二、三	地下水汚染	二、三
納入水垢汚染	二、三	納入水垢汚染	二、三
光害汚染	二、三	光害汚染	二、三
公害	二、三	公害	二、三
ヒト・アイルランド現	二、三	ヒト・アイルランド現	二、三
騒音	二、三	騒音	二、三
振動	二、三	振動	二、三
悪臭	二、三	悪臭	二、三

自立性	安定性	適理性	附屬性	多樣性	加積性	閉塞性	節欲性	外部空間の知覚方法	志向・欲求	心理	休養・経絡	佛儒意識	節制性	審美觀	責任	合意形成	計畫	計運	住民運動	連携	参加	リサイクル	保護・保全
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----------	-------	----	-------	------	-----	-----	----	------	----	----	------	----	----	-------	-------

教育	交通	環境	土地・住宅	消費	医療	福祉	観光	余暇	労働	農林漁業	流通	地域開発	行財政	治安	司法	立法	参加	情報	計画	人口	文化	都市論
----	----	----	-------	----	----	----	----	----	----	------	----	------	-----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

3.3 環境の概念の項目

I. 環境の基本概念

大分類	中分類	小分類	抽出基準
基本概念	包括的概念	自立性 安定性 導爆性 臨厠性 多様性 加償性 有限性 閉着性 閉着性 閉着性	地域における観光の立場に関する記述 観光の地域に与える影響に関する記述 世間のブームと観光地の人気の関係に関する記述 観光地における観光の構造に関する記述 多様な観光対象および観光地の魅力に関する記述 地域における観光の発展性に関する記述 観光地の観光客受け入れ容量に関する記述 地域における観光の発展と衰退に関する記述 観光客の行動規制制、規制とその理由

表6 「環境の身体性」の項目と抽出基準

大分類	中分類	小分類	抽出基準
心理	記実	外観空間の知覚・方法	観光客の観光対象の知覚に関する記述
		心理	観光客の観光に対する心理に関する記述
	想像	志向・欲求	観光客の観光に対する志向・欲求に関する記述
		感情・記憶	観光に関する感情・記憶に関する記述
環境論	現象	現象・環境	観光と自然環境・現象・環境に関する記述
		生態性	観光と生態、および生態に関する記述
	価値	観光と観光客	観光と観光客、観光地の住人に関する記述
		生活の環境・空間・責任	観光客、観光地の住人の生活の環境や空間に関する記述 観光客に関わる人間的責任に関する記述
経済論	コミュニケーション	社会意識	観光地に関わる人間の間接的な社会意識に関する記述
		意識形成	観光地に関わる人間の間接的な意識形成に関する記述
	実践行動	観光の経済	観光地の住民の経済に関する記述に関する記述
		住民経済活動 娯楽 通遊 リタイア 移住・定住	観光と住民経済に関する記述 観光と観光に関わる人間の娯楽に関する記述 観光と観光に関わる人間の娯楽の通遊に関する記述 リタイアに関する記述 移住・定住に関する記述

表7 「環境の空間性」の項目と抽出基準

大分類	中分類	小分類	項目説明
要素特性性	自然・文化 歴史・文化 人口・社会 エネルギー・環境	自然・地理	自然環境や地形・観光地の地形・地理に関する記述
		歴史・文化	観光そのもの、および観光対象、観光地に関する。歴史
		人口・社会	観光地の都市や社会環境に関する記述
環境的空間性	産業・経済 交通・物流 サービス	産業・経済	観光地や観光に繋がるエネルギーや産業物に関する記述
		交通・物流	観光に際した移動に関する記述
		サービス	観光客に対するサービスに関する記述
公共事業性	労働・所得 情報・広報 税金・交通 医療・福祉	労働・所得	観光客に対する労働と観光に関わる人の所得に関する記述
		情報・広報	観光地の情報と観光客に関する。観光地や観光客の伝達
		税金・交通	税金と観光の関連に関する記述
公共事業性	医療・福祉 教育・文化 スポーツ・レジャー	医療・福祉	観光客に対するサービスに関する記述
		教育・文化	観光客に対する労働と観光に関わる人の所得に関する記述
		スポーツ・レジャー	観光客の移動と観光客に関する。観光地や観光客の伝達

する場合を「1」とし、該当しない場合は「0」としてまとめた。

4.1 観光論文による環境の概念の取り扱い

得られた結果をもとに、論文の「掲載誌」と「発表年度」における数の変遷から、全体の記述個数において、1987 年から 1995 年まで、1997 年の記述個数が少ないこと、1996、2000 年が記述個数の最大値をとる傾向をふまえて、1987 年から 2001 年を 3 区分した。

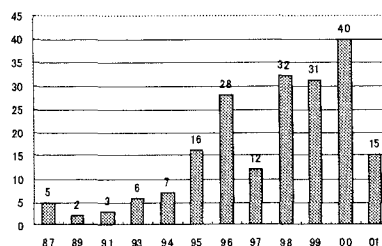


図2 各年度における論文数

表8 年代の三区分と論文数および記述個数

	年度	論文數	記述個數
第一期	1987-1994	16本	197個
第二期	1995-1998	86本	419個
第三期	1999-2001	96本	787個

また、これらの項目間の比較および考察をおこなうため、基準を使用頻度として以下に定義した。

$$\text{使用頻度(回)} = \frac{\text{記述個数(個)}}{\text{論文数(本)}}$$

この使用頻度による考察をおこなった結果を大分類ごとにまとめ、その特徴をあげ、特に減少している項目について考察をおこなった。

4.2 基本概念によるまとめ

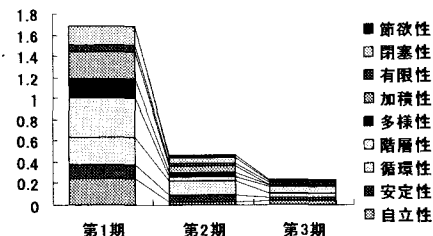


図3 基本概念の各項目の使用頻度の変遷

全体的に「基本概念」は、第2、3期における極端な減少があげられた。そのなかで、「循環性」が安定して扱われており、続いて第3期において、「自立性」および、「階層性」の使用頻度が増加している。このことから、「基本概念」は全体的に取り扱われにくかったといえる。しかし、「自立性」では観光のあり方について、清水⁹による『「マストツーリズム」』と『もう一つの観光』の共存、十代田ら¹⁰による「エコツーリズムとマストツーリズムが補完関係」、といった記述が見られた。また、「階層性」では観光の構成要素について、前田¹¹による「社会的事象としての観光と個人行動としての観光」、鈴木¹²による「観光者、受け入れる住民、行政、観光企業」、永井ら¹³による「観光者の種類、観光施設の種類の、観光シーズンと金の流れ」といった記述が見られた。

4.3 環境の身体性によるまとめ

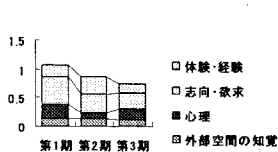


図4 知覚の各項目の使用頻度の変遷

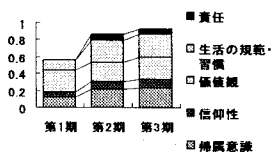


図5 倫理の各項目と使用頻度の変遷

向にあるなかで、第1期においてのみ「責任」と「リサイクル」が、第3期に「計画」の使用頻度が見られない。さらに、第2期において「合意形成」の使用頻度が激減している。

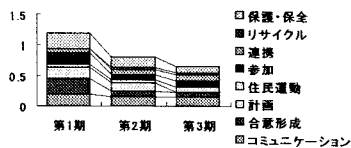


図6 支援行動の各項目と使用頻度の変遷

しかし、「責任」の項目において西澤ら¹⁴は「秩序ある滞在生活を送るための生活ルール」、豊田

「環境の身体性」において、「コミュニケーション」と「志向・欲

求」が3期を通じて使用頻度が高く、安定していたという。しかし、「倫理」の項目が全体的に増加傾

15は「社会的マナーと人間関係のエチケットを学ぶ」といった一時生活者としてのマナーやルールに関する記述が見られた。また、「リサイクル」では、末石ら¹⁶による「リサイクル技術と文化」、星野¹⁷による「リサイクルルートの確立の遅れ」、といった観光における「ものの循環」を扱うものも見られた。「合意形成」について、淡野ら¹⁸は「地域整備と利用者の態度の合致」、前田¹⁹は「サービスに対する共通基盤作り」、といった記述が見られた。これは、観光における意思決定の主体が明確ではないため、合意形成まで到達していないと考えられる。その例として、「計画」で見られた記述は、嘉名ら²⁰による「スキー場設計の要点としてコースの形状とスキー場側のイメージ形成要因への着目」や本橋ら²¹による「観光地域のゾーニング」のように装置や仕掛けとしての「計画」の記述が見られた。

4.4 環境の空間性の項目によるまとめ



図7 要素特性の各項目と使用頻度の変遷

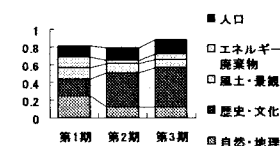


図8 権力性の各項目と使用頻度の変遷

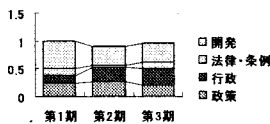


図9 資本性の各項目と使用頻度の変遷

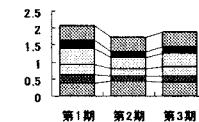


図10 公益享受性の各項目と使用頻度の変遷

全体的に「環境の空間性」の使用頻度は高く、なかでも、中分類である「資本

性」に含まれる項目や、「開発」、「交通」といった項目が安定していた。さらに、

「歴史・文化」は、使用頻度が時間を経過するに従って大幅な増加していた。しかし、第1期

においてのみ、「医療・福祉」の使用頻度が見られなかった。さらに、第2期にお

いて、「エネルギー・廃棄物」、「法律・条例」、「税金」、「余暇」といった項目に関する使用頻度が減少している。その反面、「行政」、「教育」に関する使用頻度が、この時期に増加している。

このうち、観光の見るではなく、見る立場から新しい係わり合いとして「医療・福祉」の項目では、末石ら²²による「福祉観光」や、崔²³による「高齢者の福祉と生活の質」といった記述がみられた。日常生活と観光の係わり合いとして「余暇」の項目ではレーゲラント²⁴による「長期休暇の取りにくい休暇制度」や、崔²⁵による「ゆとりの潮流」に関する記述が見られた。「エネルギー・廃棄物」の項目では、末石ら²⁶による「永久移動とごみ問題」、前田²⁷による「分不相応消費」、といった記述が見られた。「法律・条例」の項目では、張²⁸による「社会的通年としての遵法精神の促進」、「税金」の項目では、西澤ら²⁹による「会費や利用料金による運営」、原田³⁰による「入材料の徴収」、それぞれ記述が見られた。

4.5 観光論文における環境の概念のまとめ

観光に対する実務的要請が高いのは、「環境の空間性」の中でも「資本性」と圧倒的に結びついており、利害関係が明確であるからと考えられる。さらに、「自立性」や「階層性」から、観光は観光客をゲストから、一時的住民として地域のシステムに取り込むような構成を目指している。しかし、環境の概念の核心ともいえる「計画」・「合意形成」・「エネルギー・廃棄物」といったものの取り込みが困難であるといえる。

5. 環境の概念の統計的分析

5.1 数量化Ⅲ類による「環境の概念」の定置

前節でのまとめは、単純集計から主観的に読み取ったものであり、その結論を裏づけるために統計学的に解析する。そこで、まず数量化Ⅲ類³¹によって、それぞれの「環境の概念」である各項目間の関係を定置する。

(1) 軸の設定について

第1軸は、上位の項目に「生活の規範・習慣」、「価値観」、「体験・経験」、「歴史・文化」とあり、下位の項目は「消費」、「産業」、「サービス」となっている。この軸は、「文化の商品化と経済活動」とすることができる。

第2軸は、上位の項目に「政策」、「行政」、「開発」とあり、下位の項目は「志向・欲求」、「体験・経験」、「価値観」となっている。この軸は、「Public—Personal」とすることができる。第3軸は、「歴史・文化」、「志向・欲求」「政策」「開発」「情報・広報」が上位の項目にあり、下位の項目には「生活

表9 環境の概念の上位12項目による1・2・3軸のスコア

カテゴリ	第1軸	第2軸	第3軸
生活の規範・習慣	1.9649	2.2842	1.3483
価値観	1.4080	1.2486	1.1009
体験・経験	1.2442	0.6798	0.7701
歴史・文化	0.9880	0.4777	0.7620
政策	0.4027	0.2704	0.7548
志向・欲求	0.0838	0.2219	0.0888
行政	-0.2353	-0.1993	-0.1152
情報・広報	-0.4532	-0.2673	-0.9553
開発	-0.7589	-0.4255	-0.7600
サービス	-0.9189	-0.5262	-0.9553
産業	-1.1440	-0.9595	-1.0859
消費	-1.2387	-2.1304	-1.1149
生活の規範・習慣			-1.8625

(2) 論文の変遷

観光論の変遷として、12項目による数量化Ⅲ類のサンプル得点の分散図に表したものが以下の図である。これらの分散図より、第1期から第3期への時間の変遷において、第3象限から、第1象限に向かう傾向が得られる。

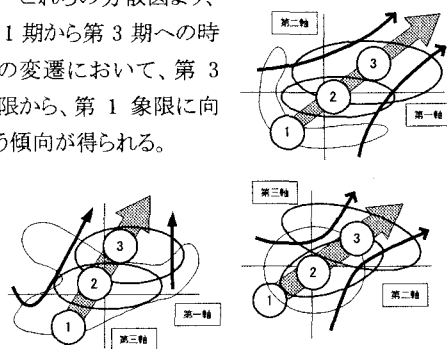


図11 各軸の論文の年代区分による変遷

(3) 考察

前項で設定した軸を用いて各観光論文の変遷について分析を行った結果、以下のような所見を得た。なお、紙面の都合上で散布図は省略して結果のみを

記す。観光論文が「環境の概念」のなかでも、「経済活動」、「個人」、「観光客の選好」から、「商品化される文化」、「公共性」、「観光客の誘致とその支援」に扱う傾向があるといえる。ここから、観光は観光客個人や産業だけの事象ではなく、地域全体の事象に拡大しただけ人間の対象範囲が広がったということがわかる。

5.2 クラスタ分析による類型化

(1) 環境の概念に基づいた分類

定置された「環境の概念」としての項目を、クラスタ分析による類型化をおこなう。³² これによって、類似した環境の概念に基づいて、各論文を観光論として分類することができる。この際、ク

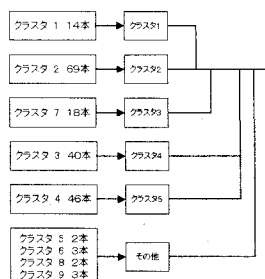


図12 デンドログラム

ラスタは9に分類されたが、その所属する論文数から、実質的に5つに分類されていたため、この5つのクラスタ以外は、「その他」としてまとめ、除外する。これを数量化Ⅲ類の散布図上に表したものが以下の図である。

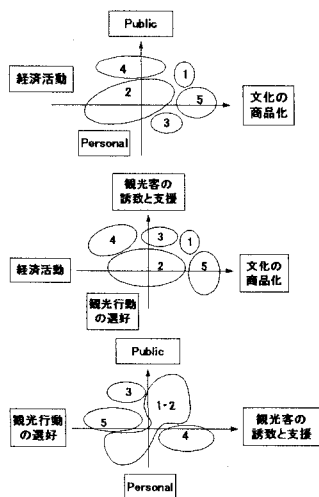


図13 各軸におけるクラスタ分布図

また、このように分類されたクラスタに対して、所属する論文の傾向から各クラスタを解釈した。

クラスタ1:観光地の民族性

特徴的な論文としては、「オーストラリア・アボリジニと文化観光」³³、「アメリカ・インディアン」の霊性への旅」³⁴、「蘭嶼ヤミ族と観光」³⁵といった論文が挙げられ、観光や観光地の民族性に関するものである。

クラスタ2:観光地の地域性

特徴的な論文としては、「Tourism Studies」の規範化に関する研究³⁶、『観光学』を求めて³⁷などは、観光原論に関する論文がみられる。また、「ペルーのエンテリック・ツアーにおけるオーセンシティと文化的リアリティ」³⁸、「観光がアジアの女性に与えたインパクト」³⁹、「張家界の観光開発と社会効果」⁴⁰、「新治村の観光発展過程と観光地形成」⁴¹、『神戸南京町』の再構築と観光」⁴²、「韓国東萊温泉の発達過程に関する研究」⁴³など、地域における観光の開発とその効果に関する論文がみられた。このクラスタは、論文数が最も多く、原論およびその周辺の論文がみられることから、中心的なクラスタであるといえる。

クラスタ3:交流

特徴的な論文としては、「菊人形の興行化と展開」⁴⁴、「場所の神話化」⁴⁵、「境の空間を創造すること」⁴⁶、「観光における“異文化理解”と文化仲介者に関する研究」⁴⁷、「観光地イメージに対する旅行関与と他者意見の影響」⁴⁸、「現代小説から模索する新しい旅」⁴⁹、「岡山県日生長頭島における民宿の展開過程」⁵⁰が挙げられ、これらは交流に関するものである。

クラスタ4:観光開発

特徴的な論文としては、「中国における雑技芸術と観光開発に関する研究」⁵¹、「観光関連施設の需要に関する分析」⁵²、「国内観光空洞化とその活性化」⁵³、「激変した香港への旅行需要とその背景」⁵⁴、「我が国におけるリゾート需要の現状とその将来動向」⁵⁵が挙げられ、これらは観光開発に関するものである。

クラスタ5:観光の需要と供給

特徴的な論文としては、「耳の旅の経験」⁵⁶、「旅の寝暮らし」⁵⁷、「バックパッカーの観光学」⁵⁸、「生涯健康と余暇活動」⁵⁹、「外国人旅行者の誘致の問題点」⁶⁰、「芭蕉の旅に見る観光リゾートの風景」⁶¹が挙げられ、これらは観光の需要と供給に関するものである。

(2) 観光論の変遷

これらの散布図において、論文は第1期から第3期への時間の変遷において、第3象限から、第1象限に向かう傾向があるため、観光論の変遷として以下のようにまとめることができる。まず、「観光の需要と供給」や「観光開発」といった論が展開されている。これは産業や政策などの実務的な観光論としてスタートしている。この二つを取り込む形で、「観光地の地域性」が観光論の中心となっている。さらに、ここから派生する形で「交流」や「観光地の民族性」といった論が展開されている。

6. まとめ

6.1 結論

観光論において、観光地にゲストである観光客がもたらす経済的側面が主流であった。しかし、観光による自然破壊や観光が政策として扱われることによって観光は公共性を帯び、観光地の地域性を重要視するようになったため、それにかかわる環境の概念を取り込むことによって、観光客を一時的な住民とする立場の内部化が進んでいる。つまり、この「資本性」の力によって生じるゲストである観光客とホストである観光地の住民の間にある従来のゲストーホストの関係を崩したといえる。しかし、この両者の利害関係の明らかなどころでは環境の概念の根本とも言うべき「計画」「合意形成」「エネルギー・廃棄物」は論じられていないため、環境の概念が完全に取り込まれていないことが明らかである。

6.2 今後の展望

観光論は環境の概念を一時的住民である観光客と住民の新しい関係がまだ構築できていない。さらに、実務的要請が高まっているため、差異化が必要となり、観光を計画するためには、どのような「光」をどれくらいの人に見せるのか、それでいて面白くなければならない、という人の循環と魅力の問題があげられる。このような課題に対するひとつの解決策として、ある明確な目的をともなった自発的な行動として、観光客の間で共通の理解や、認識が形成される必要があると考えられる。

<註>

- 1 長谷政弘編著、観光学辞典、同文館、pp23、1997
- 2 長谷政弘編著、前掲書、pp13
- 3 岡本伸之：観光学入門 ポスト・マストゥリズムの観光学、pp149-167、有斐閣アルマ、2001
- 4 末石富太郎・環境計画研究会：環境計画論、pp13-14、森北出版、1993
- 5 青木陽二：環境知覚に関する最近の研究動向、環境情報科学、22-3、pp74-86、1993
- 5 近藤隆二郎：「環境システム研究」における環境の理念・環境論の多様性と展望、第28回環境システム研究論文発表会 講演集、pp45-54、2000
- 6 末石富太郎・環境計画研究会：前掲書、1993
- 7 環境省：平成12年度環境白書、2001
- 8 NIRIA：地域問題300選の概観
- 9 玉村和彦：アジアの観光開発の構想「マストゥリズム」と「もう一つの観光」の共存一、観光に関する学術研究論文集、第一回、1995
- 10 西村幸子：エコツーリズムー持続可能な観光に向けての模索一、観光に関する学術研究論文集、第三回、1997
- 11 前田勇：「豊かな観光」と観光における豊かさに関する考察、立教大学観光学部紀要、第三号、2001
- 12 鈴木忠義「観光学を求めて」、観光研究、日本観光研究者連合、No. 1、2、pp2-5、1987
- 13 永井護ら：観光消費の経済的效果に関する推計方法、観光研究、日本観光研究者連合、No. 2、1987
- 14 西澤倫太郎ら：野尻湖における外国人別荘地「神山国際村」の成立と展開、観光研究、日本観光研究者連合、No. 3、1989
- 15 豊田三佳：アカ族の婚約者探しの旅と社会変容、旅の文化研究所研究報告、No. 4、1996
- 16 末石富太郎ら：Tourism Studiesの規範化に関する研究、旅の文化研究所研究報告、No. 4、1996
- 17 星野朋子：ホテル産業における有機性廃棄物管理の枠組み、立教観光学研究紀要、No. 2、2001
- 18 淡野明彦ら：近接観光行動のための地域整備ードイツにおける事例を中心にー、旅の文化研究所研究報告、No. 4、1996
- 19 前田勇：「サービス」用語法分析、立教大学観光学部紀要、第一号、1999
- 20 嘉名光市ら：スキーコースの基本設計に関する一考察、観光研究、No. 7-1、1995
- 21 本橋悠ら：自然環境の優れた地域における駐車場対策の考察、観光研究、No. 7-2、1996
- 22 末石富太郎ら：前掲論文、1996
- 23 崔東日：高齢者観光の促進制度に関する研究、日本国際観光学会論文集、Vol. 6、1998
- 24 マリー・ルイゼ・レーゲラント：日本の湯治文化、旅の文化研究所研究報告、No. 5、1998
- 25 崔東日：前掲論文、1998
- 26 末石富太郎ら：前掲論文、1996
- 27 前田勇：前掲論文、2001
- 28 張朝服：第二次世界大戦後における台湾の観光事業について、観光研究、No. 10-2、1999
- 29 西澤倫太郎ら：前掲論文、1989
- 30 原田隆：少数民族と観光ータイの高地民族に関するケーススタディー、観光研究、No. 4、1991
- 31 各項目における論文の記述回数から、項目の総数の中間である45個以上の12項目によって数量化Ⅲ型をおこなった結果は以下のとおりである。なお、分析には、エクセル統計2000を用いた。
- 32 この分析には、SPSS 10.0J for Windows、固体と固体の類似度を表すためにはward法および、クラスター間の距離を決める方法として平均ユークリッド距離をもちいた。
- 33 田村恵子：オーストラリア・アボリジニと文化観光ー観光客の視点からー、旅の文化研究所研究報告、No. 3、1995
- 34 川上と志夫ら：アメリカ・インディアンの霊性への旅、旅の文化研究所研究報告、No. 7、1998
- 35 曾山毅：蘭嶼やミ族と観光ーその背景としての中華民国と蘭嶼の政治的な関係、立教大学観光学部紀要、第一号、1999
- 36 末石富太郎ら：前掲論文、1996
- 37 鈴木忠義：前掲論文、1987

- 38 細谷広美:ペルーのエンテリック・ツアーにおけるオーセンシティと文化的リアリティ, 旅の文化研究所研究報告, No. 3, 1995
- 39 安福恵美子:観光がアジアの女性に与えたインパクトの事例研究-旅の文化研究所研究報告, NO. 4, 1996
- 40 慎藤華:張宝界の観光開発と社会効果, 旅の文化研究所研究報告, NO. 8, 1999
- 41 清尾良隆:新治村の観光発展過程と観光地形成, 立教大学観光学部紀要, 第二号, 2000
- 42 大橋建一:「神戸南京町」の再構築と観光, 立教大学観光学部紀要, 第二号, 2000
- 43 任和淳ら:韓国東萊温泉の発達過程に関する研究, 観光研究, No. 6, 1994
- 44 川井ゆう:菊人形の興行化と展開-旅する技の軌跡-, 旅の文化研究所研究報告, No. 5, 1998
- 45 塩路有子, 場所の神話, 英国コッツウオルズ地域におけるイングリッシュネスの発見, 旅の文化研究所研究報告, No. 7, 1998
- 46 神田孝治:境の空間を創造すること-戦前期における南紀・白浜温泉の形成過程を事例として, 観光に関する学術研究論文集, 第七回, 2000
- 47 寺田麻里子:観光における“異文化理解”文化仲介者に関する研究, 立教観光学研究紀要, No. 2, 2000
- 48 大谷新太郎ら:観光地イメージに対する旅行関与と他者意見の影響, 立教観光学研究紀要, No. 3, 2001
- 49 荒澤秀穂:現代小説から模索する新しい旅, 日本国際観光学会論文集, vol. 2, 1994
- 50 鶴田英一:岡山県日生長頭島における民宿の展開過程, 観光研究, No. 4, 1991
- 51 橋爪紳也:中国における雑技芸術と観光開発に関する研究, 旅の文化研究所研究報告, No. 9, 2000
- 52 岡野英伸:観光関連施設の需要に関する分析, 大阪明浄大学紀要, 第一号, 2001
- 53 内藤嘉昭:対日理解と国際観光, 日本国際観光学会論文集, vol. 3, 1995
- 54 印南進:激変した香港への旅客需要とその背景, 日本国際観光学会論文集, vol. 6, 1998
- 55 細野光一ら:わが国におけるリゾート需要の現状とその将来動向, 観光研究, NO. 8-1, 1996
- 56 重信幸彦:耳の旅の経験-昭和初期・別府亀の井バス「少女車掌解説付地獄巡り」, 旅の文化研究所研究報告, 1996
- 57 豊田三佳:前掲論文, 1996
- 58 高容生:バックパッカーの観光学, オーストラリアにおける分析, 観光に関する学術研究論文, 第三回, 1997
- 59 辻道夫:生涯活動と余暇活動, 大阪明浄大学紀要, 開学記念特別号, 2000
- 60 富川久美子:外国人旅行誘致の問題点, 日本国際観光学会論文集, vol. 7, 1999
- 61 溝口周道:芭蕉の旅に見る観光リゾートの風景, 観光研究, NO. 9-2, 1998